2022.03.02 提出　令和 3 年度研究会活動報告ポスター

表象論基礎研究会　活動報告

先端総合学術研究科 2 回生　浦野智佳（研究会代表）

2022.2.28 読書会感想
マーシャル・マクルーハン
「メディアはメッセージである」

マーシャル・マクルーハンの『メディア論』（栗原裕・河本伸聖共訳『メディア論―人間の拡張の諸相―』、みすず書房、1987）は、メディア論の古典中の古典として読み直しが行われている。今回の研究会では、この本の冒頭論文「メディアはメッセージである」を精読した。その際、J・M・カルキン「マクルーハン理論とはなにか」（マクルーハン＋E.カーペンター、大前正臣・後藤和彦共訳『マクルーハン理論－－電子メディアの可能性－－』平凡社、2003）と柴田崇「メッセージはメッセージ」（『マクルーハンのメディア論―身体論の集合―』、勁草書房、2013）を補助線として、アフォリズム的で読解が難しいマクルーハンの主張を考察し、ディスカッションを行った。1960 年代に、マクルーハンは、メディアとは透明・中立なものではないという、現在のメディア研究の常識となっている主張を行った。マクルーハンのいうメディアとは身体を「拡張」した人工物全てをさすが、それらのメディアの理解は常に前の時代を参照することによってのみ可能とした。このようなマクルーハンのコード化は、常に動的とされたためにアポリアを抱え込んだが、それは現代の表象文化を研究する際の困難と限界に自覚を促す。インターネットや VR といった IT 技術の現在においてもマクルーハンの議論は示唆に富み、その理論的枠組みはインターネットカルチャーや、ひいては近代日本の雑誌文化を対象とするメンバーの研究にも有益であることが確認された。

・扱った文献

McLuhan, Marshall, 1964, Understanding Media : The Extensions of Man, New York : McGraw-Hill ; London : Routledge and Kegan Paul.（栗原裕・河本伸聖共訳, 1987, 『メディア論―人間の拡張の諸相―』, みすず書房.）

今年度の活動について

本研究会はサブカルチャーや批評理論、精神分析や美学芸術学などの異なる領域の研究者によって開催され、各々の研究領域を主要書籍とともに紹介することを通して研究会メンバー全員に対して新たな視点を提供するとともに、発表者も門外漢の意見を受けることによって自身の研究のフィードバックになるような知見を得られる環境が形成されていった。この点は、領域が異なるメンバー間の研究活動を相互理解していくにあたって最も有意義な点であったと考えられる。また、会によっては文献紹介だけでなくメンバー自身の執筆した原稿をメンバー間で検討するなど、メンバー間での積極的な意見交換の会も設けることができ、この点もまた有意義であった。

しかしながら、メンバー間で査読論文や修士論文(博士予備論文)、および学会報告などのスケジュールが過密になっていくにしたがって、研究会参加メンバーの減少や研究会開催ペースの低下があった。昨年度から継続されている感染防止対策の一環として、本研究会でもオンライン開催を積極的に用いていったが、各メンバーの情報機器に関するトラブルや、オンラインゆえのコミュニケーションのしづらさなどの問題が明らかになった。今後数年間にわたって Zoom などを使用したオンライン研究会は頻繁に開催されることは想像に難くないが、今後に研究会を開催する際にはオフラインで開催するメリットとオンラインで開催するメリットのそれぞれを検討したうえで、場合によってはハイブリットで研究会を開催できる方法などを模索していく必要があると考えている。